

去る2月8日(金)、県総合福祉センターゆいホールにおいて、「地域の福祉力アップセミナー2008」が開催された。(主催/沖縄県社会福祉協議会)

◎セミナーの目的

本セミナーは、地域住民の自発的、主体的な参画による新たな支え合い活動を推進し、本県の福祉文化を形成していくことを目的に昨年度に引き続き開催しているものである。

地域の福祉力とは、福祉の専門職や地域住民が協働し、地域の多様な福祉課題等に対して、情報を共有し、共感し合いながら、地域の多様性や異質性を受け入れ、活動を作り出し、地域のありようを構想していく力である。

今回のセミナーでは、格差社会といわれ、生活のしづらさを訴える住民の声の高まりを貧困問題とおしきつかけ作りを必要とする、比較的住民による自発的な取組みが難しい課題をテーマに開催された。

第1部 講演
貧困問題との対峙
どこからも漏れる人たちの支援を考える



▲講師の湯浅誠氏
(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長)

◎多様化する相談事例

湯浅氏の所属する団体では、生活に困った人からの相談を受け付けている。従来は、日雇い労働者や母子世帯など古典的な貧困層とする人びとからの相談が主だったとのことであるが、最近の傾向としては世帯構成や性別、年齢を選ばず、一つの力テグリーでは括れない相談事例が増えており、多様化しているという。これは、日本全体が貧困化しているということだと湯浅氏は話す。

◎三層のセーフティネットから落ちていく人々の「溜め」のない状態

私たちは、雇用のネット、社会保険のネット、公定扶助のネットの三層のセーフティネットで守られている。しかし、今、その三層のネットがぼろぼろになって、このセーフティネットから抜け落ちて行く人が増えている。しかも、この三層に張り巡らされたネットは、3つで1セットになっていとも言われ、派遣労働者などの非正規雇用者は、失業のリスクが高く、雇用のネットから落ちやすいが、社会保険ネットの一つである失業手当が受給できない場合が多く、最後の公的扶助のネットでも生活保護においても、若いからまだ働けるから等と受け止めてもらえないことが多いのだという。若者の貧困が増えているのは、社会の構造がそうなっているからで、驚く事ではないと湯浅氏は説明する。

では、この網から漏れた人々が全て貧困状態になるかというと、そうではない。貧困に陥るかどうかの分かれ道は、彼らを支えられる家族がいるかどうかだという。家族福祉が

◎生活困窮者の「溜め」を大きくしていくために

もやいでは、生活困窮者からの相談を受けたり、アパートの保証人になるなど、社会資源の充実に努めると共に、当事者がランチを食べに来るサロンを開き、「居場所」づくりを行い、当事者のエンパワーメントを諮っている。この社会資源の充実と当事者のエンパワーメントは、生活困窮者の「溜め」の拡大において、車の両輪であり、どちらか一方だけではダメだという。

例えば、生活保護を受給してアパート暮らしを始めた野宿者にとつ

て、野宿生活にあった人との関係が途切れ、部屋で一人生活する場合、金銭的な「溜め」は増えても、人間関係の「溜め」は減ってはいないか。全体的な「溜め」の状態を見ることが大切なのだという。

当事者のエンパワーメントは、当事者とフラットな関係で支えることの出来る民間の役割で、社会資源の充実は、公的機関の役割として充実させていかななくてはならない。

しかし、現在、相談者に合わせて社会資源をつなぎ、コーディネートする役割を担う人が、どこの部署にもいないのが実情だ。縦割り行政の中で結局、たらい回しになり、どこからこぼれ落ちてしまう人びとが出てくるのは、コーディネーター不在という問題が大きいと湯浅氏は訴えた。

第2部 実践報告
孤立した人びとへの支援について

◎実践報告1

「二トと呼ばれる若者への支援活動から」

上江田 紫寿江 氏
沖縄県には、2万5千人の二トがいるといわれ、二ト率が全国一で深刻な問題となっている。卒業や中退で学校を離れた後、職業生活に

◎実践報告2
「ホームレス自立支援活動から」

山内 昌良 氏

県外からの移住者も増え、沖縄県のホームレスが増加傾向にあるという山内氏。以前は、ホームレスのいる公園というのは、限られた公園であったが、最近では那覇市や浦添市においては、ほとんどの公園で彼らを見る事ができ、ホームレスの生活の場が分散傾向にあるという。

山内氏が代表を務めるプロミスキーパーズでは、公園を回り彼らに声をかけながら、飲食物を提供して



▲実践報告を行う(左から)上江田氏、山内氏、高野氏

◎実践報告3

「支え合いマップづくりから見える地域支援」

高野 大秋 氏

高野氏は、地元の民生委員や地域相談センターの職員と共に、地域の中で福祉的な問題を抱えるいわゆる気になる人や地域から孤立している



▲講師の話にじっくり耳を傾けるセミナー参加者

人と地域住民のことを良く知っている世話好きな人を押し、それぞれの繋がりを矢印で地図に書き込んだ支え合いマップづくりを行っている。

近隣住民との付き合いが苦手な地域の中で孤立している人に対しては、本人の想いを引き出しながら、その想いを実現する協力者・世話好きな方を地域住民の中から見つけ、つなげていくことが必要だという。

高野氏はこのつなぎ役のコーディネーターが社協職員の役割であるとし、気になる人、孤立する人のニーズを解決するキーマンを民生委員や社協職員だけで担うのではなく、地域の色々な分野の世話好きさんを結びつけ、支援する側とされる側ではない、住民同士による双方の支え合いの輪を作ることが、地域の福祉力アップにつながっていくのではないかと報告した。